『君ヲ泣ク』

樋口ミユ

登場人物

長女／女１／大尉／老婆１

次女／女２／助産婦／老婆２

三女／女３／妊婦／老婆３

弟／無名／兵士

ｓｐａｃｅ１

ピクニックは青空と決まっている。
ビールとおにぎり。
そして笑い声。
あっはっは。
あっはっは。
あっはっは。
女たちが笑う。
これがピクニック。
真白な布１枚、ふわりと地面に置いた。
ほほ笑みながらバスケットを持つ。
優雅に座って食べ物を並べる。
優雅に、素敵に。
そうして追加の情報がひとつ。
女たちの頭の上には、
無数の砲弾が飛び交っている。

女たち　あっはっは。

ドカン。
バキュン。

女たち　あっはっは。

ドカンバキュン。

女たち　あっはっは。

ドカン。
笑うことをやめて、
空気を切り裂く音を聞く。
ヒューーーーーーーーーー
女たちの視線はその音を追いかけていく。
ヒューーーーーーーーーーー

ドッカン。

遙か向こうの大地が赤く染まった。
音の行く先の果てを見届けて。
視線をビールとおにぎりに戻して。

女たち　あっはっは。

そこへ防護服を着た無名の誰かがやってくる。

無名　何やってんですか！？
女１　ご覧のとおり。
女２　ピクニックですわ。
無名　こんなところで！？
女３　え、ピクニック。
女２　さどうぞどうぞ。
無名　何が！？
女３　遠慮なさらず。
女１　ビールはお嫌い？
女２　ならお紅茶いかが。
女３　あら、お水がない。向こうの小川で汲んでくるわ。
無名　わぁぁぁぁぁぁ！　ここらへんの川の水飲むなんて自殺行為でしょう！
女１　あら、紅茶はお嫌いみたいよ。
無名　ではなくて、
女２　なら珈琲をおススメして、
無名　おかしいでしょうこれは！
女３　紅茶か珈琲どちらがよろしいか聞くのがおかしいと？
無名　いえ、でなく、
女１　普通のことよね。
女２　ねぇ。
女３　ね。
無名　普通じゃないでしょう！
女３　普通って、何？
女１　紅茶か珈琲どちらがいいか選べるってことよ。
女２　素敵ね。
長女　素敵よ。選べるという普通が一番、
女３　一番、何？
女１　普通がなによりも一番豊かだってことよ。
女３　豊かって、何？
女１　サンドイッチかおにぎりか、選べるってこと。
女２　うどんかパスタか選べるってことよね？
女３　携帯会社を選べるってことでもいいの？
女１　いい喩え。最近じゃ制服をスカートかズボンどちらか選べるんだもの。
女３　じゃ新薬かジェネリックか選べるってことでもいいのね。
女２　そうそう。入院治療か在宅治療か選べるってことでもいいのよ。
女１　ええ、それって普通で当たり前でとても豊かよ。
女３　結婚式のスタイルを選べるってことね。
女１　夫婦別姓を選べるってことよ。

女２　職業を選べるってことね。
女１　選べる立場にあるならね。
女３　避妊するかしないか女のほうが選べるってことね。
女１　あらいいこと言う。
女２　埋葬方法さえも選べるってことよ。
女１　それから宗教も選べるってこと。
女２　亡命先も選べるのかしら。
女１　選べるわ。国籍でさえももうね。
女３　そろそろ人種も選べるかな？
女１　遺伝子操作のやりようによっては。
女２　じゃあ寿命でさえも選べるような気がするわ。
無名　あの。
女１　選べるってなんて素敵。
女２　素敵ね。
女３　素敵だわ。
女１　それって、選ばなかったほうを拒否したってことだもの。
女２　選択権を持つってことは拒否権も同時に持ってるってことなのね。
女３　でも両方選ぶってことも選択肢にはあるでしょ？
女１　あらヨクバリさんの末っ子的意見。
３人　あっはっは。

女たちは無名を見た。

女１　だから私たちがどこでピクニックしようが、選んでいいってこと。選べないのは悲劇じゃないかしら。
無名　だけど。

ヒュゥン、ドン。

無名　わざわざ。

ヒュゥン、ドン。

無名　なにもわざわざこんなところ。

ヒュウン、ドン。

無名　こんな、

ヒュウン、ドン。

無名　こんな戦場境界ラインギリギリで……

ヒュウウウウンン……
花火を眺めるように、
誰もが口を開けて空を見上げつつ。

女1　いつものことよ。お気になさらず。で？　紅茶になさいます？　それとも、コー……

誰もが、
ゆっくりと、空を見上げた。
何かの軌道を見つめるように。

女1　ヒーーーーーーーーーーーーーーーーー……

ドン。

闇の中で青白い光が見える。
それは大画面モニタ。
ぴ。
小さな赤い点がひとつ、点滅。

大尉　はぁ！？　今なんつった？
兵士　はい。大尉殿。今自分が言ったことを復唱いたしますと、小1時間ほどお時間がかかりますがそれでも一言一句復唱したほうがよろしいでしょうかの御判断を仰ぎたいと、
大尉　編集、編集しろ！　巻いてもう一度。
兵士　はい。大尉殿。さきほど、アジア区域戦場境界ライン上にて出現。
大尉　また出たか……
兵士　はい。
大尉　やはりピクニックしていたか。
兵士　はい。ご機嫌に。
大尉　現状報告！

大画面には焼野原。

兵士　吹っ飛びました。
大尉　またか。
兵士　戦場境界ラインギリギリですので。
大尉　レベル8の危険区域に行くほうがバカだ。
兵士　自己責任は聞き飽きました。
大尉　こっちもだ。
兵士　大尉殿。
大尉　ウザい！

なぜかわけもなく殴られる兵士。

兵士　ありがとうございます。

なぜか感謝する兵士。

大尉　……幽霊じゃ、ないよね？

兵士は固まる。

兵士　は？

大尉　幽霊じゃないよねぇ？

兵士　大尉殿、

大尉　え、なに。

兵士　いえ、大尉殿が実態のないものを恐れるとは思いませんでしたもので、

大尉　だって出現しまくりじゃん。このまえはこっちの戦場境界ラインに現れて、今度はそっちの戦場境界ラインで、そんでもってまた別の戦場境界ラインにもいるし、

兵士　大尉殿、

大尉　いつだったか同時に出現した時もあったし、ミッキーマウスだって同じ時間に出現しないようにしてるのになんで、

兵士　全部吹っ飛んでます。

大尉　だから幽霊じゃないのンってビビってんだろうよ！

兵士　もっとおそろしかものです、大尉殿。

大尉　お前ハカタ生まれ？

兵士　すみません、思わずクニの言葉が、

大尉　標準、標準装備！

兵士　はい！　もっと恐ろしいものです、大尉殿。

大尉　恐ろしい、とは？　怨念よりも？　思念ってすんごい怖いんだよ。思いが凝り固まって見えるんだから。あ、生霊って知ってる？　この前ちょっと手出した二等兵女子がもうかなり怖くて家のドアの前で待ってんの。勘弁してよぉって思ってたら細い指が首にまとわりついて悲鳴あげて気絶したら朝になってたよ。恐ろしいよ恐ろしい。紫式部はスゴイね。もう遙か昔から女の怨念がこの世で一番恐ろしいって分かってたんだから。

兵士　実物ですよ、大尉殿。

大尉　え。

兵士　人間そのものです。大尉殿。

大尉　え？

兵士　大尉の首を絞めたのはちょっと手を出した二等兵女子その人、生身だろうし、戦場境界ラインに出没するのも、毎回生身そのものです。

大尉　悪かった。二等兵女子の話は今のところ外してくれ。

兵士　はい。

大尉　生身とは？

兵士　出現する彼女たちは、いつも新しい彼女たちです。

大尉　あたら、しい、三人姉妹、で、あると？

兵士　お言葉ですが、

大尉　なんだ。
兵士　三人姉妹とは正確ではありません。遺体回収後のＤＮＡ鑑定によれば彼女たちは赤の他人です。
大尉　分かってる。こっちでそう呼んでるだけだ。
兵士　は。失礼しました。
大尉　新しいの意味を教えろ。
兵士　はい。全くの別人たちということです。毎回新しい女三人が戦場境界ラインに登場して飛び交う砲弾の最中にピクニックで戯れ笑い飽きるほど喋り倒して吹っ飛ばされ、また別の、新しい彼女たちがふらりと登場して、
大尉　雨あられのように飛び交う砲弾の中、ピクニックしようかって女たちが世界中にいるってことか？
兵士　そのようで。
大尉　マジか。
兵士　遺体はきちんと回収しておりますから。千切れ飛んだ細部まで探して、間違いありません。
大尉　おかしくね？
兵士　え。
大尉　そんなの、おかしくね？　繋がってるんじゃないの、ＳＮＳとかで。
兵士　この誤爆については全て情報は伏せられているはすです。
大尉　だよね。
兵士　しかし、
大尉　漏れてんじゃないの。いつだって情報は鍵かけてもすぐに誰かに開けられるものだし、内通者もいるかもしれない、
兵士　しかし民間レベルにまで漏れることは断じて、
大尉　ていうかさ。
兵士　はい。
大尉　漏れていて欲しいんだけど。
兵士　え。
大尉　情報ダダ漏れでさ。
兵士　はぁ。
大尉　みんなで阻止しようとかタッグとか組んでさ。相談してさ。協力してさ。ずっと前にほら、人間の鎖とか言ってたみたいにさ、今度はアタシら行くね、とか言い合ってさ。
兵士　は、
大尉　そのほうが、納得できる。
兵士　はい……
大尉　漏れてなきゃさ、大いに情報漏れてくれてなきゃ、これ、

大画面から火花。
砲弾が飛び交うシーンが見える。
空爆。
真夜中のカーニバルのようにも見える。

大尉　世界中の女たちが同じこと考えてるってさ、

飛んで行く砲弾が、やけに美しい。

大尉　すんごく恐ろしいじゃんよ……

ぴ。

大画面に、もうひとつ赤い点が点滅。

兵士　報告。

大尉　またか。

ぴ。

兵士　報告。

大尉　また？

ぴ。

兵士　報告。

ぴ。

ぴ。

ぴ。

兵士　ほう、こ、く……

ぴ。

ぴ。

ぴ。

ぴ。

ぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴぴ。

赤い点が、いつしか大画面を覆って、

真っ赤に染まる。

地を揺るがすような、イキミが聞こえる。

真っ赤に染まった画面の向こう側で、

妊婦がひとり、イキんでいる。

妊婦　ぬぉぁあああああああ！

傍らに助産婦がいる。

助産婦　はい、吸って。

妊婦　ぬぉぁあああああああのおぉぉ！

助産婦　次は吐くのよ、吐くー。
妊婦　あのおぉぉぉぉぉちょっといいですかぁぁぁぁ。
助産婦　それ今じゃないと駄目？　今度は吸うのよ吐かないで吸う！
妊婦　あのぉぉめっちゃ痛いんですけどぉぉ！
助産婦　そういうものだから。
妊婦　死ぬほど痛いんですけどぉぉぉ。
助産婦　産んじゃえば忘れる痛みよはい、吐いてぇ。
妊婦　そんなもんなんですかねぇぇぇぇぇぇぇ！
助産婦　そんなもんよ。吸ってぇ。
妊婦　ヒーーーーーー……！
助産婦　はいイキンで！
妊婦　ぬぉおおおおおおおお！
助産婦　頭が見えてきたわ。頑張って。
妊婦　ぬぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！　あとどのくらいすか！
助産婦　もうちょっと！
妊婦　ぬぉぉ！
助産婦　頑張って、もうちょっと、もう、もう……あ。
妊婦　え。
助産婦　あー……
妊婦　え、何？

助産婦、ちょっとこれは信じられないという顔。

助産婦　大丈夫ですよぉ吐いてぇ。

作り笑顔で妊婦を励ます。

妊婦　いや、めっちゃ気になるんですけどぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！
助産婦　はい、もう一息！

妊婦が最大のイキミをすると、
銃声一発、鳴り響く。

妊婦　ぬぉ？

助産婦はくるりと生まれた赤子をお包みでくるむ。

助産婦　お疲れ様です。元気な弾のような赤ちゃんですよ。

助産婦の腕の中で、お包みくるまれたトカレフが激しく泣く。
泣き声は銃声。
何発も何発も響き渡る。

妊婦は、ゆっくりとお包みに手を伸ばす。

妊婦　……かわいい……かわいい……赤ちゃん……

お包みをそっと抱きかかえる。

妊婦　かわいい……かわいい……私の……

妊婦は何かを感じて、助産婦を見た。

助産婦　何か？

妊婦　どうしてだろう……

助産婦　はい？

妊婦　ピクニックに行かなきゃ……

助産婦　え？

妊婦　ピクニックに行かなきゃいけないって、どうしても行かなきゃいけないって、思っちゃったんです。

妊婦はお包みを抱いてゆっくり立ちあがる。

助産婦　おにぎり……

妊婦　え。

助産婦　おにぎりとビールなんて組み合わせ、

妊婦　ああ、いいですね。あ。

妊婦、窓の外を見た。

妊婦　流れ星……？

ヒューーーーーーーーーー

と、空気を切り裂く音がする。

助産婦　いいえ、違うでしょう。

ドン。

妊婦　あ……戦車。

行進曲が聞こえてくる。

高揚するような、

行進曲。

お包みの布はいつのまにか、はためく旗になる。

戦車がコンクリートの道を通り過ぎて行く。

ｓｐａｃｅ２

通り過ぎていく行進曲。
やがて、遠く遠くに。
けれどまだ聞こえ続けている。

長女は、行進曲を聞くともなく、

ザク。
両手で土をかき出す。
ザクザク。
宙に、土を放り出す。
ザクザクザク。

溜息のような、嗚咽のような、泣き声のような、
声が零れた。

ああ。

一雫、垂れた汗をぬぐう、長女。
また、ザクザクザクザク。
土をかき出す。
長女は誰かに話しはじめる。
誰もいない。
そばにあるのは、
シーツ１枚。
何かが包まれている、シーツが１枚。

長女　昔ね、

ザク。

長女　流行ってたから。

ザクザク。

長女　子どもって、そういうハナシ、好きだから。

ザクザクザク。

長女　子どもだったから。

ザクザクザクザク。

長女　私たち。

掘り進めていく。

長女　１２時に合せ鏡を見ると死ぬ時の顔が映る、とか。

長女　鏡に吸い込まれる、とか。

長女　あの世に連れていかれる、とかね。

長女　信じていないくせに信じてるから、

長女　試したくなって、

長女　でもあれはね、

長女　私たちがね、

長女　お姉ちゃんたちがね、

長女　試したのは、

長女　死ぬ時の顔でも、吸い込まれるわけでも、あの世でもなくて、

長女　なくって、

長女　鏡に、

長女　光をね、

長女　反射、

長女　眩しくて、

長女　見えなくて、

長女　でも、

長女　見るの。

長女　見えないから、

長女　見たくて、

長女　見えなくて、

長女　見づらくて、

長女　見据えて、

長女　魅入って、

長女　見違えて、

長女　やっと、

長女　見え始めたけど、

長女　見ようとしたのはね、

長女　ミライの世界。

長女　違う。

長女　世界のミライ。

いつのまにか、掘り進める速度が増して、
狂ったように土を殴るように掘っていくと、

長女　は、

突然、

長女　どんなだったっけなぁ……

長女、空を見た。

長女　見て見て。爪の先にサイレントスターが乗っかってる。サイレントスターはとっても静かだから。何にも言わないから。周りが騒がしいと本当にどこにいるのか分からなくなるから。だから、静かに。集中しないと聞き逃す。何かを伝えようとしてくれているのに僕らはいつもそれを聞き逃すんだ。し。全部教えてくれるんだ。僕がどうして息を吸って吐いて吸って吐いているのか。僕がどうしてここにいるのか。僕がどうして夜眠って朝目が覚めるのか。全部知ってる。迷ったら僕は耳を澄ます。おねいちゃん、目を瞑ると星が見えるでしょう。ぎ

よっと瞼押さえつけると。赤黄青緑白流れ星土星みたいな輪っかダイヤモンドダストみたいな細かいキラキラ。ミルキーウェイが見えるでしょう。僕は毎晩空を見上げて星と、宇宙と、空と交信し続けていたけれどナンにも繋がらない。当たりまえだ。サイレントスターは僕の目の中にあったし、砂粒の中にあったし、水筒から落ちる水滴の中にあったし、おねいちゃんたちが吐く息の中にあったし、靴の裏底にあったし、睫の先にあったし、食べ残したおにぎりの米粒にあったし、

長女　……ひとつぶ

長女　たったひとつぶ。

遠くで、何かが聞こえる。
銃声のような。
砲弾のような。
大砲のような。
遠くに聞こえていた行進曲が、
少しずつ、
少しずつ、
またこちらへ近づいてくる。

長女、包まれたシーツの端っこを握りしめた。
ぐいぃぃとシーツをひっぱり、
コロリと中身が転がり、
長女が掘っていた穴に落ちていく。
コロリ。
スマホのような器具。
コロリ。
少しイカツイ、ヘッドフォン。
長女の手には、シーツが1枚。
残されただけ。

行進曲がさらにさらに近づいてくる。

姉は穴を見下ろす。
風が吹いた。
垂れたシーツが揺れる。
姉の足元で、微かに。
顔を上げる。
風を見ようと試みているかどうかは分からないが、
姉は目を閉じた。

行進曲はどんどん近づいて、
長女の間近まで近づいて。

ぷつりと、途絶える。
風だけが吹いている。
突然。
にゅっと手が出た。
女の手。
ゆっくりと穴の端をつかみ、
にゅぅぅっと、頭を出す。

次女　大姉ちゃん、大姉ちゃんってば。

長女は、顔を出した次女を見下ろした。
驚く。
長女は、何も言えないほどに驚く。

次女　あのねあのね、クラスでね、噂のミラー。やってみようよ噂のミラーミラーミラー。

長女　……ちいちゃん。

ぬぼっと上半身を突き出して、
次女は膝を穴の端っこに引っかけて、

次女　あ、よっこいせー。

穴から抜け出す。
次女は長女の横に並んだ。
すると、
にゅっと、穴からまた手が伸びた。
長女はまた伸びた手を見下ろす。
驚く。
長女は、何も言えないほどに驚く。

三女　ちい姉ちゃぁぁぁぁん……！

必死な声。

三女　大姉ちゃぁぁぁぁぁん……！

次女　もぉ、うるさいのが来たぁ。

にゅぅぅっとまた頭が出る。

三女　らんちゃんもいくおー……！

次女　あんたは早く寝なさいって。

飛び出した頭を穴に戻そうと押し込める次女。

三女　イタイイタイ、ちいちゃん、イタイ！

次女　子どもは寝る時間なの。

三女　ちい姉ちゃんだって子ども、

次女　あんたより大人。

頭をぐいっと突き出す三女。

押し戻そうとする次女。

次女　寝なさいってば。

三女　やだ。

次女　夜はオバケでるんだから。

三女　らんちゃん怖くないもん。

次女　うるさいって、バレるじゃんよ。

三女　大姉ちゃぁん、ちいちゃんが意地悪するぅ。

次女　大姉ちゃぁん、こいつうるさい。

きあ。きあ。きあ。きあ。

次女と三女は、きあきあと、きあきあと、戯れる。

驚き呆然と立ち尽くすだけだった長女は、

幼い頃から見慣れた次女と三女の小競り合いに、

思わず、

いつものように仲裁に入った。

長女　やめなさい。

次女　だって、

三女　だって、

長女　何時だと思ってるの。

次女　はッ！　何時！？

長女　え、あ、

次女の勢いに思わず。

長女　えと、

腕時計を見た。

長女　１１時ごじゅう……
三女　もう？
次女　急がなきゃ、
三女　急がなきゃなきゃ、

三女が穴から這い出てる。
次女と三女は長女が持っているシーツをつかんだ。

シーツが一枚。
ふわりと空気を孕んで、
３人の上にゆっくりと落ちてくるシーツを見あげながら、

長女　あの頃は、あの頃はね、

あの頃は行進曲など聞こえなかった。

ｓｐａｃｅ３

小さな白いシーツの山が出来た。
もぞりもぞりと小さな山は動く。
くすくすと笑い声。
内緒話でもするように、くすくすと笑い声。
カチリと懐中電灯をＯＮにする音がして、
シーツの内側から布が透けて光る。
昔、内緒の秘密基地を作った。
シーツのなかで、内緒の世界をつくった。
幼い、三人姉妹。

長女　しー。
次女　しー。
三女　しー……

静かに、という仕草をしながら、くすくす笑う。
長女は懐中電灯を抱えて、
次女は緑と虫がいっぱいのガラスケースを抱えて、
三女はお菓子を抱えて、シーツの中。

長女　見て。

懐中電灯の灯りに手をぴったりつけて。

次女　わぁ。大姉ちゃん、指の端っこが赤い。
三女　うん、赤い。
長女　どうしてだと思う？
三女　大姉ちゃんの指だからだよ。
長女　体の中が透けて見えてるから。
三女　私のは？　私のは？　私のは！？
長女　同じよ。
三女　違うかもしれないもん。
次女　私パープルがいいな。
長女　血だよ。
三女　じゃ私金色。
長女　血の色なんだってば。
三女　金色だもん。貸して。

三女も手をぴったりつけてみる。

三女　あ。

次女　ナンだふつうー。貸して、私は絶対パープ、

今度は次女が試してみる。

次女　あ。
三女　ナンだふつー。
長女　パープルなら即入院だからね。
三女　どうして赤いの？
長女　流れてるから。
次女　何が？
長女　だから、ち。
三女　ち？
長女　赤い血。
次女　これ血の色？
長女　懐中電灯の灯りで透けて見えるの。
三女　血の色ってなんで赤いの？
次女　それはあれだ、あれ。
三女　あれって？
次女　あれはアレ。
三女　ちい姉ちゃん、知ったかしてる。大姉ちゃん、なんで？
長女　なんか……血の中に赤くなる色のモトがあって、
三女　モトって何？
長女　なんだったかな。
三女　なんで？　なんで血って赤いの？　なんで？　なんで？
長女　そう決まってるの。
三女　なんで決まってるの。
長女　昔から決まってるの。
三女　人間の血は赤って？　なんで？
次女　ニンゲンだからに決まってるじゃん。バカ。
三女　ちい姉ちゃんなんも知らないくせに。
次女　あんたよりは賢いんだよ、バカ。
三女　バカっていうヤツバカ。
次女　バカ。
三女　バカバカ。
次女　バカバカバカ
三女　カバ
次女　カバのバカ。
長女　しっ……！

３人、一瞬外の気配を気にする。
かすかに赤ん坊の泣き声がする。

長女　起きちゃった？

３人、耳を澄ます。
しばらくして、泣き声は止む。
息を止めて。
じっとする。

長女　しー。
次女　しー。
三女　しー。

三女　パパとママも起きちゃったかな？
長女　しー……

と言いながら耳を澄ます。
次女と三女も真似して耳を澄ます。

長女　静か……？
次女　寝たかな？
三女　もう泣いてない。
次女　今なんじ？

長女、目覚まし時計を取り出し、驚く。

長女　１１時５９分。
次女　うっそ！
三女　１２時なっちゃうよ！
長女　静かにして。バレたら私が怒られるんだから。
次女　早く出してよ。

三女、うんせと少し大きめの鏡を取り出した。
次女と三女で鏡を持つ。
長女がふたりの間で懐中電灯を抱きしめる。

長女　もっとちゃんとかぶって。光洩れるから。
次女　そっちから洩れるって。
長女　ママにバレちゃうからちゃんと。
三女　光で鏡ピカピカにするんでしょ？
次女　反射させるんだよ。
三女　ピカピカしたら見えにくいのに？
長女　見えにくい、その光の反射の向こうを覗くのよ。
次女　１２時ぴったりにね。

三女　ミラーでミライ？　ホントに見えるのかな。
次女　うちの学年でもみんな噂してるし。
三女　でもまだ誰も見られてないっていうのが、うちの学年でのジョーホーだよ。
次女　願いが足りないんだよ。
三女　なんて願うの？
長女　ミライの世界が見えますように。願って。
次女　ミライの世界が見えますように。
三女　ミライの世界は甘い……
次女　甘い！？
三女　道とか、家とか、全部甘いの。ケーキとかで出来てて、花壇の花とかお砂糖のカタマリで、
次女　吐きそうバカ。溶けたらベッタベタになるじゃんよ。
三女　だって私が見たいミライの世界は甘いのがいいんだもん。
次女　何ミライだそれ。
三女　クリーム王国。
次女　おぇ。
三女　おぇって言うな。
次女　森だよ。ぜーんぶ森。スィーツ禁止。
三女　ヤだ。そんなのケムシばっかになる。
次女　ケムシ嫌がるなバカ。
三女　おぇ。
次女　おぇって言うな。
三女　今、もぞって動いた。気持ち悪い。
次女　これはキレイなの。
三女　ちい姉ちゃんのガーデン持ちこまないでよ。
次女　あんただってお菓子持ちこんでる。
長女　し。またあの子起きちゃうでしょ。
次女・三女　し。

三人姉妹はぐっと息をつめる。

次女　大姉ちゃんは？

ひそやかな声で次女が聞く。

長女　私？
三女　うん。大姉ちゃんがソーゾーするミライは？
長女　分かんないわ。

懐中電灯を見た。

長女　分からないから、見てみたい。

長女　見えるものならね。

長女　１１時５９分５０秒。

長女、ぐっと腕時計を突き出す。

三女　９、
次女　８、
長女　７、
３人　６、５、４、３、２、

懐中電灯が鏡に反射して、

姉妹　わぁ。眩しい……

眩しくて、長女は目を覆った。

しばらく。
そのまま。
時間が止まったような、沈黙。

カチコチ。
ゆっくりと時間が流れ始める。
覆った手が
静かに、静かに顔から離れて、いく。

ｓｐａｃｅ４

目の前には食卓。
白いテーブルクロス。
ふと向かい側の席を見ると、弟が座っている。
手元で何かを操作している。
ぼそぼそと、呟いた。

弟　仕事中は絶対私語厳禁です。

録音しているのだろうか。

弟　乗船客が勝手にしゃべるのは、そのままにしておきます。

ぼそぼそと、

弟　こっちからは決して話しかけてはいけません。

呟く。

弟　ましてやこの海面上国境を超え、地上を、祖国を捨て、海上キャンプに逃げ込もうとする理由を、

弟　決して。

弟　聞くことなかれ。

弟　絶対私語厳禁。

弟はスマートフォンのようなものを、
ケースの中に仕舞う。
ダシの匂いがしたような気がして振り向くと、
大きな鍋を持った次女がやってくる。
その後ろを、食器を持って三女がやってくる。
湯気の立つスープを三女が食器に注ぐ。
食卓に、スープ。
おいしそうな湯気が立ち上る。
食事は４人分。
大人の三人姉妹、ゆっくりと椅子に座った。
次女が、弟にカバの帽子をかぶせると、

次女　あんた超絶似合うわよ。

弟　ありがとう。

三女　弟よ、バカにされてんだ、それくらいは理解しろ。
次女　違う、愛情よ。バカにカバの帽子なんて愛情に決まってるじゃない。
三女　悪意に決まってるよね大姉ちゃん。
長女　ちいちゃん、悪気はないのよ。
次女　偽善よりマシでしょう。
弟　おねいちゃん。
３人　なに。
弟　ぼくはかばじゃないしばかじゃない。
長女　分かってる。
次女　でも似合ってるわよそれ。
弟　ありがとう。
三女　絶対分かってないなこれは。
長女　で、何しに帰ってきたの、ちいちゃん。かばの帽子渡しに来たわけじゃないでしょう。
次女　家出てきたの。
三女　また？
長女　すぐ戻るんでしょ。
次女　戻らないわよ。
長女　って言っても、どうするの。
三女　ちい姉ちゃんがひとりでやっていけるわけないっつーの。
次女　いけるわよ。
三女　ちい姉ちゃんナニが出来る。パート探すのも大変なジダイに何が出来るんだよ。
次女　だからここに帰ってきてるんじゃない。
長女　うちも余裕ないのよ、ちいちゃん。
次女　あらお気になさらずよ。自分の部屋に戻るだけだから。
三女　大姉ちゃん、部屋代毎月いくらかもらいな。
次女　なんで実家に家賃払わなきゃならないのよ。
三女　ほら完全頼りきるつもりだ。ちい姉ちゃん、いくつ？
次女　困ってる時だからこその実家でしょうが。
三女　どうせ働く気もなけれりゃ家のこと手伝う気ないくせに。
次女　どーして実家なのに家事なんかしなきゃならないのよ。こっちはね何年も主婦やってきたんだからね。
三女　ぐうたら主婦代表のくせに。
次女　手抜きも技術がいるの。
三女　栗原はるみを見習え。
次女　はるみは、あれは職業主婦なのよ。
三女　出てきたんじゃなくて、追い出されたの言い間違いだろ、どうせ。
次女　すがる旦那を蹴散らかして出て来たのよ。
三女　ぐうたらすぎて子どもを姑に連れていかれちゃったくせに。
次女　連れて行かれたんじゃない。誘拐されたの。
三女　モノは言いようだな。
次女　あんたは、
三女　なに。
次女　なんでここに帰って来てるのよ。

三女　私は、
次女　もしかして、あんたも？
三女　私は地元で活動するために戻ってきたんだから、地元に貢献するため。ちい姉ちゃんと一緒にしないでくれる。
次女　ビックマウスの成れの果てってわけね。
三女　べつに果ててない。
次女　“こんなところで一生グズグズするなんてゾッとする”とか言って出ていったんだったっけ。
三女　こんなとこなんて言ってない。
次女　言った言った。大姉ちゃんも憶えてるよね。こいつ、あんなに吠えて吠えて吠えまくって、
三女　吠えてない。盛るな。
次女　盛ってない。
三女　３割増しで盛るのがちいねえちゃんの得意技。
次女　アタシニハユメガアルンダカラ！　とか言ってなかったっけ？
三女　夢くらい誰だってあるよ人間なら。
次女　せっかくパパが役場の窓口の仕事の話もらってきてくれたのに、歩いて１５分の職場なんて嫌、仕事と家の往復で人生が終わるなんて嫌、顔見知りばっかりで嫌、知り尽くしてて嫌、大ねえちゃんと同じ職場じゃ学生のころと変わらないから嫌、みんな私のこと知ってて嫌、嫌、嫌、嫌、イヤイヤ星人か。仕事があるだけでもありがたいって思いなさいよ。口開きゃあ、嫌か、夢かどっちかしか言わない。夢夢夢夢夢って、ユメユメ星人か。あんたの夢なんかどうせ昼休みになったら財布だけ片手にランチ食べに行きたいくらいのもんだったんでしょうが。
三女　丸ノ内のＯＬなんか興味ないわ。ちい姉ちゃんがごろ寝してテレビ見てる間に、私は土にまみれて地球の看護してたのよ。
次女　でもそれやめて帰ってきたんでしょうが。
三女　だから今度は地元の土地を、
次女　とか言いながら熱上げた男がそーゆー活動してて、そいつに捨てられたから泣いて戻ってきただけでしょ。情報は大姉ちゃんから聞いてんだからね。一番初めはナンだっけ？　音楽やってる彼氏にくっついて家出て捨てられて、その次は会社立ち上げるとかいう男と一緒にいてお金だまし取られて、それからナンだっけ？　捨てられるたんびにこっち戻ってきてはまた出て、
三女　人のことよりも自分のことすっごい正当化してない？
次女　なにがよ。
三女　役場の仕事、ちい姉ちゃんが無理だったから私に話が来たんだろ。
次女　無理、じゃないわよ。私はコトブキ退社したのよ。
三女　ちい姉ちゃん、昔っからぐうたらで、片付けもちゃんと出来ないし、部屋なんてゴミ溜めみたいになるし、書類の書き方もパニクって間違いだらけだし、電話応対も緊張してはははははいこここここちらままままどぐちですががが、って、使い物にならないからなんとかしてくれって役場の人がパパに泣きついてきたんじゃない。なにその内弁慶。私、知ってるから。
次女　あの頃は、疲れてたし、勤めるのは性に合わないのよ。
三女　じゃあ、ちい姉ちゃん、何が出来る？　何が性にあってる？　家のことも育児もぐうたらであんまり放置しすぎるから虐待じゃないかって児童相談所からウチにまで連絡きて、そういうのネグレクトっていうんですけど。
次女　生活って書いて苦しみって読むのよ。
三女　旦那と姑に同情するね。

次女　あんたみたいに好き勝手生きてる人間にはわかんないつらさがあるのよ。
長女　やめなさい。
次女　あんたなんかフラフラ好きなことしてるわりには月末になったら大姉ちゃんに泣きついたでしょ。
三女　泣きついてない。あれは支援。
次女　支援！？　しーえーん！？　っていうほど大層なことやってたわけ？
三女　有意義なこと。
次女　ゆーいぎ？　人ん家の貯金食っておいて、ゆーいぎ！？
三女　私は世界のために活動してた。
次女　はぁ？　世界？　ナニサマ？
三女　今度は地元のために活動するんだからちい姉ちゃんとは違う。
次女　オトコによって自分のやること変わる尻軽女。
三女　違う、やっと自分のやること見つけたんだから。看護してるんだよ。
次女　なにを？
三女　だから地球。そして人間。
次女　はッ。
三女　病気にかかってるのは地球そのものなんだ。人間がどうにかしなきゃ、私ら死にそうな船に乗ってるようなもんなんだよ。未来のために、地球のために、私がやろうとしてることは、自然の復活、緑の楽園、汚染された空気の再生、土地の改善、もう地球自身が出来る浄化作用は限界来てるんだから。治癒力の支えになるように、地球のための漢方処方みたいなもんで、
次女　言っとくけど去年の１１月に大姉ちゃんに泣きついて送ってもらったお金は私の貯金だからね。
三女　嘘！
次女　ホント。大姉ちゃんだって余裕ないんだからね。
三女　大姉ちゃん！
長女　パパとママの葬儀があったからちょっと苦しくて。
次女　あんたはね、自由だとか言いながらものすごく、とてつもなく、どうしようもなく、家族に迷惑かけてるの。
三女　人にばっかり頼る欠陥人間のちい姉ちゃんには責められたくない。
次女　あんただって大姉ちゃんに甘え過ぎじゃない。
三女　だから支援だっつー、
長女　ふふ。

長女が笑った。

次女　大姉ちゃん。
三女　何笑ってんだ。
長女　だって、

長女、くすくす笑う。

長女　おっかしい。
次女　だから何がよ。
長女　ひっくり返っちゃったなぁって。昔はちいちゃんのほうが緑緑緑、そこらじゅう森でいっぱいになる仕事

するのかなって思っていて、らんちゃんのほうがふわふわ甘いお菓子作るお母さんになるのかなぁって、想像してたんだけど、
三女　私は大きくなって賢くなって、ちい姉ちゃんはバカになっただけだろ。
次女　私は現実見てるだけ。あんたは理想と男を追いかけてバカなことやってるのよ。
長女　時間が過ぎると、ずいぶん変わっちゃうのね。
次女　大姉ちゃんがなんも変わってないからこうなってるんでしょ。
長女　え、何の話？
三女　出た。
次女　何よ。
三女　直角で話を曲げた。ちい姉ちゃんの必殺技だ。
次女　だって、大姉ちゃんがこんなだから、

次女は弟のカバの頭をつかむ。

次女　こいつ、いつまで経っても働かないで、のーのーと、家でゴロゴロしてんのよ。
長女　それ私のせい？
次女　他にないじゃない。
三女　ま、一応長男だし？
次女　末っ子長男はだいたい甘やかされすぎなのよ。
三女　それを言うなら次女って自分勝手のオンマイウェイ。
次女　ヒトを大まかに分類しないでしょ。
三女　そっくりそのまま返す。
長女　あのね、
三女　でも大姉ちゃんの甘やかしは、一理あるね。優しいから。
長女　あの、
次女　大姉ちゃん、自分の人生どっかに置いてきちゃってバカなこいつの世話ばっかして、
長女　あのね、
三女　もっと好きに生きればいいのに。
次女　あれよ、長女の苦悩ね。
三女　また大まかに分類してる。
次女　冷静な分析よ。
三女　でもこいつがバカだから働けないのは大姉ちゃんの優しさのせいじゃないだろう。
次女　工場行け、缶詰工場。
弟　はたらいてるよ。
次女　え。
三女　え。
次女　え？
長女　ええ。そうなの。
三女　え？　働いてる？
次女　え、働いてるの？
長女　ええ。働いてる。
次女　こいつが？

長女　ええ。
三女　働いてる！？
次女　え？　はらたいら？
長女　働いてるの。
弟　うん。ぼく。はたらいているんだよ。

次女と三女は信じられないという目で弟を見る。

次女　配送とか？
三女　や、無理だろ。
次女　掃除とか？
三女　厳しいな。
次女　ハンダつけ、
三女　古くないか？
次女　仕訳、
三女　出来るか？
次女　やっぱ缶詰こう、

長女は黙って食事をしている。

三女　大姉ちゃんが無言でかばってる。
次女　なんだ、やっぱり嘘、
長女　本当よ。
次女　ならちゃんと生活費も入れてるわけ？
三女　大姉ちゃんホントこの子には特別甘いんだから。
弟　うそじゃないよ。はたらいてる。
次女　嘘じゃないならねぇあんた何の仕事してんのよ？
弟　ぼくは、
次女　あ！？　きこえない。
弟　ぼくは、
三女　ヴォリュームのつまみ回せ。
弟　ぼくはぁ、

その時、サイレンが鳴った。

次女　やだ、また？
三女　どの土地いってもやってること変わりないね。
次女　そんな時代だしね。
三女　だから私が活動している意義が、
次女　焼け石に水よ。
三女　ちい姉ちゃんみたいな人たちが多いから、
次女　すぐにおさまらないみたいね。

三女　あ、ちょっと長め？
次女　一応シェルター入っとく？
三女　一応ね。

次女と三女、スープ皿を持ったまま立ちあがる。

次女　あんたもスープ持って行くの？
三女　当たり前だ。

ガタン。
弟が勢いよく立ちあがる。

次女・三女　？

弟は右手をしっかり上げて立っている。

弟　仕事の時間です。

次女　……は？
弟　仕事の時間です。
三女　え、なに言って、
弟　仕事の時間です。

弟は右手を長女に差し出した。

長女　ええ……そうね。

長女はテーブルの下からトカレフを取り出す。
次女と三女はそれを見る。

長女　いってらっしゃい。

弟は長女が差し出したトカレフを手に取った。

ｓｐａｃｅ５

ゆっくりと。
ふわりと。
１枚のテーブルクロスは、
揺れる海面になる。

キラリ。
光る。
ミラー。

鏡に映るのは、弟。
ジョリ。
ジョリ。
ヒゲを剃る。

ポーン。
何かの音がする。
ヒゲを剃りながら、弟は少しその音に耳を傾ける。
業務アナウンスだ。

「３番埠頭、到着。乗組員は速やかに業務に当たってください。
繰り返します。３番埠頭、到着。乗組員は速やかに業務に当たってください。」

顎についた石鹸の泡を拭うと
弟はヘッドフォン装着して船に乗り込んだ。
乗船客はすでに３人。
魔女のような老婆たち。
流れる声は、きっと弟のもの。

弟　昨日は３人運んだ。ひとりは男、４０代くらい。無精ひげ。足元ふらつく。酒くさい。ひとりは女、２０代。剥げたネイルばかり気にしていた。どーせみんな最後は死ぬんだしっていうのがログセ。最後のひとりは、おじさんのようなおばさん。パンチパーマのパンチがキいてた。

両手で何かをつかむ仕草。

弟　仕事中は絶対私語厳禁です。

前後に動かす。

弟　乗船客が勝手にしゃべるのは、そのままにしておきます。

前後に動かす。

弟　こっちからは決して話しかけてはいけません。

前後に動かす。

弟　ましてやこの海面上国境を超え、地上を、祖国を捨て、海上キャンプに逃げ込もうとする理由を、

弟　決して。

弟　聞くことなかれ。

弟　絶対私語厳禁。

弟の手の動き。
船のオールだろうか。
ギィ……
と、船が軋む音がする。

弟　仕事の鉄則を、忘る、べ、からず。

ギィィギィィ

弟　僕はすぐに忘れちゃうから。

ギィギィギィィ

弟　何でもすぐに忘れちゃうから。

ギィギィギィギィィ

弟　こうやって、

弟　毎日、

弟　自分に、

弟　言い聞かすのです。

弟　仕事の鉄則を、忘る、べからず。

弟　忘るべからず。

ギギィ

弟　べからず。

弟　からず。

弟　らず。

弟　ず。

弟　ず。

弟　ず。

弟　ズ。

弟　Ｚ

弟　ＺＺ

弟　ＺＺＺ

こっくりこっくりと、弟は船を漕ぎながら、船を漕ぐ。

船には３人の老婆たちが乗っている。

老婆１　ちょいと。

弟は杖でこづかれた。

弟　あっ……！

老婆１　船漕ぎながら器用に船漕ぐんじゃないよ、危ないだろうよ、にいちゃん。

弟、何も言わずにただペコリと頭を下げた。

老婆１　居眠りするかね普通。運転中だよ。

老婆２　ババァ３人だからって仕事の手抜くんじゃないよバカヅラ。ちゃんと送り届けな。

老婆３　え？　なんつった？

老婆２　あんたに言ったんじゃない。

老婆３　あそう。ここでパスポート見せるのね。

老婆１　一番若いくせに耳が遠いんだから。

老婆２　難民にパスポートなんかいらないのよ。
老婆１　こっちじゃない、そっちそっち。どこ見て言ってるの。
老婆２　もう細かいところ見えないのよ。ボンヤリとしか見えないのよ。
老婆３　え？　なんつった？
老婆２　ハイハイ。
老婆３　え？　なんつった？
老婆２　ハイハイ。
老婆１　海上キャンプまであとどのくらいかねぇ。
老婆３　え？　いま１０万光年って言った？
老婆１　海なのよ、宇宙じゃないのよ。
老婆２　言っても聞こえてないから。
老婆１　地上の難民キャンプはもう満員すぎてね、
老婆２　言っても届いてないから。
老婆３　地上の難民キャンプ満員。
老婆２　なんでそこだけ聞きとるのさ。
老婆１　おい。

また、コツンとこずかれた。
弟は振り向く。

老婆１　いつになったら着くんだい？

弟はただペコリと会釈をするだけ。

老婆１　だんまりだよ、この子。
老婆２　オシかい？
老婆３　ああ、ああ。
老婆１　長くなるのか、もうすぐなのか、どっち。
老婆３　ああ、ああ。
老婆２　揺れる船だねぇ。
老婆１　老体に長旅は厳しいのに。
老婆２　ホントに行き着けるのかいねぇ。
老婆１　着かなきゃならないさ、ぜがひでも。
老婆３　おにぎり。

老婆３がおもむろにおにぎりを差し出す。

老婆３　かかお。
老婆１　おかかだろ。

老婆たちはおにぎりを貪って、
海上から地上を見る。

老婆１　おお、おお。こっから見ると、まるで対岸の火事だねぇ。

赤く染まる地上を眺めている。

老婆２　離れて見るときれいだねぇ。

遠くから聞こえるのは、砲弾の音かもしれない。

老婆１　離れてりゃね。

老婆２　あそこに子どもや夫がいたら気が狂うだろうね。

老婆１　なら私たちは幸いかい？

老婆２　いやぁ、どうだろう。

老婆１　綺麗だろうけれど、私は小指の爪が痛むよ。

老婆２　小指の爪？

老婆１　自分の身体の中で一番小さきところがね、痛む。火花が飛び散って赤い花が咲いて赤い血が流れるとね、誰のだろうとね、痛まないはずの小さな小さな爪が、先が、痛む。

老婆２と３、向こう側を見る。

つられて、弟も船を漕ぎながら見る。

老婆２　ああ、うん。何言ってるか分からないけど、感じることは出来るね。

老婆１　それは私らが女だからかねぇ。

老婆２　いやぁ、ニンゲンだからだよ。

老婆１　じゃ、あすこで赤い火花ぶっぱなしてるのは人間じゃない？

老婆３　カタマリ。

老婆１・２　うん？

老婆３　ニンゲンのカタマリ。

おにぎりを見た。

老婆３　米、粒。ひとつひとつは、米。粒。粒。粒。固まったら、おにぎり。別のもの。ニンゲン、固まったら、巨人。

老婆１・２　巨人……？

ざぁぁぁ……波の音。

揺れる船の上、三女が足元あぶなく立ちあがり、

老婆１、２は、「おお……」と船の縁に手をつく。

弟はオールを漕ぐ手に力を込めなければならなくなる。

おお、

ざぁぁぁぁ、

おお、

ざぁぁぁぁ、
老婆3はおにぎりを貪り食いながら、
ボロボロとおにぎりの、米粒をこぼしていく。

老婆3　いつもいつもね、透明な巨人が現れるんだよ。ジダイジダイ透明巨人。正体はこれだね。

ぼろりと零れた米、ひとつぶ取り出す。

老婆2　米？
老婆1　一粒だろ。ニンゲンひとつぶ。

老婆3　ひとつぶひとつぶ、ひっつきあってかたまりあって一緒くたになって、かたまりから離してみれば、一粒なのに、カタマッたら、巨人になってもう止められないんだ。

その米一粒をまたおにぎりのカタマリの戻す。

老婆3　あるジダイジダイ透明巨人は火花を創りだして、あるジダイジダイ透明巨人は膨大エネルギーを創りだして、あるジダイジダイ透明巨人はぜーんぶ、何もかも、無視した。ジダイジダイ透明巨人、ジダイジダ破壊の透明巨人、創ってんのはこの一粒一粒だ。ジダイジダイ透明巨人は神出鬼没で、そのくせこのたった一粒が自分らで巨人を創りだすことも出来たりして、でも思わぬところで現れたり、思わぬところで崩れ去ったり、そんでアトでおもうんだ。こんなはずじゃなかったのになぁって、ええ？　なんつった？
老婆2　何も言ってない、あんたの独壇場だよ。
老婆3　ああ、緑茶が欲しいねぇ。
老婆2　一番若いのにもうボケてきたのかい。
老婆1　いいやぁ、ボケたやつが真実語ってんだよ。
老婆2　そういうのは狂人の戯言で島流しだね。
老婆1　私はあの対岸の火事を創る透明巨人の一粒にはなりたかないね。
老婆2　だから難民になるんだろう。
老婆1　遠く離れるさ。
老婆2　逃げるのは？
老婆1　ん？
老婆2　逃げるのは、いいのかね？
老婆1　イヤなところ突くね。
老婆2　いやさ、ちょっと考えちゃって、ねぇ、逃れようとするのも、また、透明巨人の一粒にならないのかしらねぇ。
老婆1　ババァに何が出来るの。逃げるだけさね。
老婆3　逃げきれるのかねぇ？
老婆1・2　……どうだろうね。
老婆3　逃げきれないねぇ。生きてるからねぇ。
老婆2　あ。
老婆1　また流れ星ながれた。

無言の弟も、対岸の火事を見る。
４人はただひたすら。
見つめる。

老婆１　にいちゃんも食べるか。

おにぎりを差し出したが、
弟が無言で顎をしゃくる。

老婆１　いらない？

弟はもう一度、顎をしゃくる。

老婆１　ああ……着いたかい。

老婆たちは曲がった腰を上げる。
よっこいせ。
海面を見る。
どっこいせ。
何もない海面。
海面しかない海。

老婆１　にいちゃん。

３人の老婆は何もない海を見る。

老婆１　海上キャンプはどこだい？

弟、無言でトカレフを取り出した。

老婆１　ああ、そういうことかい。

弟は銃口を老婆３人に向ける。

老婆２　どういうことだい。
老婆１　そっちじゃない、こっちこっち。
老婆２　あ、どういうことだい。
老婆１　情報漏れを防ぐつもりだね。
老婆２　ばばぁが何の情報持ってるっていうんだよ。
老婆１　民間人のフリするスパイが横行してるからじゃないかいね。
老婆２　運び屋は信用ならないね。
老婆１　どの運び屋も同じだろうよ。どうせ中央政府の管轄だろうが。気がつかなかったうちらがバカだね。逃

げたい人間を募っては葬ってるんだね。士気に関わるとか言い出すんだどうせね。にいちゃん、さっさとヤリな。うちらもさっさと地上に別れを告げてサイレントスターに戻ってグレートリバーの流れに乗るさ。

弟　……サイレント、スター……

老婆１　戻るんだ。

老婆２　身体がなくなったらね。

老婆３　もとはひとつの流れだから。

老婆１　グレートリバー。

老婆３　もとはひとつなのにね。

老婆２　もとはひとつだからさ。

老婆１　なのにあれだよ。

老婆２　対岸の火花。

老婆１　ぶっ放すのは透明巨人。

老婆３　もとはひとつぶひとつぶ。

老婆１　こっちじゃジダイジダイ透明巨人。

老婆２　あっちじゃグレートリバー。

老婆３　ウンデイの差だね。

老婆１　もとは同じひとつなのにさ。聞きな。

弟　え……

老婆１　聞こえるならね。聞きな。全部教えてくれるんだ。どうして息を吸って吐いて吸って吐いているのか。どうしてここにいるのか。どうして夜眠って朝目が覚めるのか。全部知ってる。

弟　呪いの、呪文？

老婆１　にいちゃんにはそう聞こえるなら、呪いかねぇ。

老婆が笑う。
３人の老婆が笑う。
と、まさしく、
呪いのように思える。

弟　この海面上国境を超え、地上を、祖国を捨て、海上キャンプに逃げ込もうとする理由を、

弟　決して。

弟　聞くことなかれ。

弟は撃鉄を起こす。

老婆３　あんたも。

老婆３　あんたもジダイジダイ透明巨人の一粒だ。

ざぁぁと、波の音。

かき消すように、
軽い軽い、手を打つような乾いた銃声が聞こえた。
3発。
弟は銃声を聞かないように、
ヘッドフォンから流れるやけに明るい音楽を最大ボリュームにした。

ギィ。
ギィィィ。
揺れる船の上、
弟は音楽だけを聞いている。

弟　ぼくは、

揺れる船の上。

弟　バカじゃない。

老婆の死体が3つ。
見下ろす。

弟　バカじゃ、

「5番埠頭、到着。乗組員は速やかに業務に当たってください。
繰り返します。5番埠頭、到着。乗組員は速やかに業務に当たってください。」

音楽を遮り、ヘッドフォンから業務連絡が入る。
繰り返される業務連絡。

弟　ぼくは、

機械的な繰り返しから逃れるように、弟はヘッドフォンをもぎ取った。
波の音に混じって、何か聞こえたような気がした。
空が、泣いているような気がした。
弟は見上げる。

じっと。
見つめる。
海の水面がきらりと光って、
空と繋がったような気がした。

弟　……グレート……リバー……？

老婆の死体がゆっくりと起き上がり、
海の上を歩いていく。
ゆっくり、
ゆっくり、
ゆっくり。
何かの大きな流れに乗るように、
老婆たちは歩いていく。
弟はそれをじっと見送った。

弟　っっっ……

急激な、吐き気に襲われる。
引き金を引いた手を、ズボンの布で擦る。
見えない汚れを拭うように、擦る。
吐き気を抑えながら、擦る。
ヘッドフォンからは、業務連絡が繰り返されている。

「5番埠頭、到着。乗組員は速やかに業務に当たってください。
繰り返します。5番埠頭、到着。乗組員は速やかに業務に当たってください。」

静かな海面が乱れる。
くるりと弟が飲みこまれ、
くるりと。
海が弟を包み込む。
くるりと。
弟のベッドになる。

ｓｐａｃｅ６

シーツに包まって、弟は空中を見る。
ぼんやりと。
しかし、何かを見る。
そんな弟を、次女と三女はうかがいみる。
黙って食卓に座っているだけの長女に、
三女は冷たい視線を向け、
次女はメンドクサソウな視線を向ける。

長女　そんな目で見ないでよ……

次女と三女は無言で食卓に座る。
テーブルにはトカレフ。

三女　本当に知らないって言いきる？
長女　知らないのよ。
三女　これ持って仕事って、ワケありに決まってるだろうが。
長女　でも本当に知らないの。
三女　聞けよ。喋らせなよ。
長女　守秘義務だって。
三女　はぁ？
長女　だって他に仕事ないらしいから。
三女　大姉ちゃん。
長女　なあに？
三女　役場の仕事行ってる？
長女　役場どころじゃないでしょう、今の状況じゃあ、
三女　で、今はあのバカに養ってもらっているんだ？
長女　だからね、今は本当に苦しいの、ちいちゃん、悪いけど、
三女　今、ちい姉ちゃん実家住み込み問題はどうでもいいから。大姉ちゃんって、ちい姉ちゃんに負けず劣らずバカなのか？
次女　バカじゃなくって無知なだけでしょー。
三女　ちい姉ちゃん。
次女　ね、もう寝ようよ。シンデレラタイムに眠らないと、私たちすぐ顔に疲れが出る年齢だよ？
三女　真剣に話そうよ。
次女　なんで？
三女　なんで、って……

次女は欠伸を隠せない。

次女　しょーがないのよ。時代のせい。
三女　ちい姉ちゃん。

次女　やだ、いかにも正義感丸出しの顔やめてよ。
三女　あの子が、これを誰かにぶっ放してたらどうする？
次女　そりゃ一度か二度はもうやってんじゃないの。
三女　な。あ。え。あ。何、とも、思わないの？
次女　だぁーってねぇ、２０年前なら考えられないけれど、そんなこと言ってられない現状でしょ？　だって他にどう生き延びるのよ。ウチの旦那だってやってたわよ。
三女　……は。
次女　ウチ、子どもと姑と舅がいるんだから他に道はないわけよ。選べないつらさってやつ？
三女　は。は。は。
次女　大丈夫？

三女はうまく息が出来なくなる。

三女　こんな、

息を整える。

三女　こんな、田舎に、まで、

息を、整える。

三女　こんな、だって、都心だけだと、思ってたのに、
次女　なに、あんた。疎開してきたつもり？　もうどこも一緒よ。
三女　仲間を、
次女　あん？
三女　仲間を、募らなきゃ、この、流れを止められる、仲間を、
次女　やめてよ、目つけられたら迷惑だから。
三女　ちい姉ちゃんどこまでバカなんだ。自覚ないのか、こんなになるまでボケーと生きてた自覚。
次女　やっだ、責任は私たちにもあるとか言い出さないでよ。
三女　あるよ。
次女　デモとかきらーい。
三女　フヌケ！
次女　あっはっは。こんな世界。

次女の声に、長女が振り向く。

次女　なくなるならさっさとなくなればいいのよ。
長女　ちいちゃん？
次女　もう守るものなんてないんだし。
三女　そういう諦めが、
次女　あんたが言ってることはどうせボンヤリしたヘーワとかむず痒いもんでしょ。
三女　は、

次女　理念とか、シソーとか、具体的じゃないのよ。ぶっ放してるやつらとそう違いあるの？
三女　はぁ！？　違うに決まってるだろうが、
次女　変わらなきゃいけないんだ、とか、改革しなきゃ駄目なんだ、とか、いまのままじゃいけないとか、もっと、もっとよくしなきゃ、とかね、そんなこと並べた結果が今なんだし、イイコト並べすぎるとうらっ返るのよ。
三女　は。何言ってんの。
次女　進化も進歩も変革もなんもいらないのよ。
三女　意味分からないから。
次女　あんたも自分の息子の、２歳児のちぎれた右手握りしめてみれば分かるわよ。

時間も音も空気も、凍ったようだ。

長女　ちいちゃんのところ、戦場境界ラインギリギリじゃないよね？
次女　どこからのインフォよそれ。テレビ？　そんなニュース本気で信じてるの？
長女　だって、旦那蹴散らかして出て来たんだよね？

次女はそれには答えない。

次女　もっとスッパリ終わるもんだと思ってたのに、グズグズやってるねぇ。あー、昔おばあちゃんがさぁ、ＰＰＫならいいのよぉとか言ってたじゃない？
長女　Ｐ、ＰＫ……？
次女　ピンピンしたままコロっと逝くの略よ。何が起こったかも分からない一瞬で。残されるほうがいるからやこしくてさ、だから残らないの。なんにも。だぁれも。なぁぁぁぁぁぁんにも。草も残らない。花さえ咲かない。人影もない。なぁぁぁぁんにも。そうなりゃ良かったのに。
三女　無理だ。勝ち残りたい人間がいるから、それは無理。
次女　あんた、

三女が次女を見た。

次女　私みたいな思いをする人をひとりでもなくすために考えられることがあるはずよ、とか言うのやめてよね。
三女　まだ言ってない。
次女　何も考えたくない。
三女　ダメ。考え続けるんだよ。言い続けるんだって。今すぐにはダメでも、考え続けたら絶対ＤＮＡに刻み込まれるんだって、進化のレベルにまで行かなきゃ、今、私らは新しい人間のもとを創るための土台なんだよ。１００年先の、ううん、もっと、１千年、１億年先の人間のための、
次女　なんで？
三女　え。
次女　なんであるかどうかも分からない未来の人間のために私が考えなきゃならないの？　誰が考えてくれたの、私の今、あの子の今。１００年前の人間？　１千年前の人間？　１億年前の人間？　誰がよ？

三女は黙った。
長女は次女の手を握った。
が、

次女は払いのけて立ちあがった。
サイレン。
再び、サイレン。
のそりとシーツから這い出る弟。
弟　おねいちゃん。
三人姉妹は弟を見た。
弟　仕事の時間です……
弟は右手を差し出す。
弟　仕事の、
三女　行かなくていい。引きこもりな。
シーツで弟をくるむ。
次女　っつったってねぇ、食べなきゃならないからねぇ。自給自足出来るようなキレイな土地なんてどっこにもないのよ。
三女　だからって、
弟　おねいちゃん。
三女　大姉ちゃん止めなよ。黙ってないで。
長女　私、
弟　ぼくはかばじゃない。
三女・次女　バカだよ。
弟　ぼくはたったひとつぶで、
三人姉妹たちには何のことだか分からない。
弟　巨人の、倒しかたが、わからないだけ。
弟はもう一度右手を差し出した。
弟　仕事の時間です。
三女がトカレフを手に取る。
三女　やりたくないことはしなくていい。
三女　逃げたっていい。

三女　みんながやってるからってあんたまでしなくていい。

弟　違うよ。

三女　なにが？

弟　ぼくはもう巨人の一部になっちゃったんだ。

三女　あのね、

弟　おにぎり。

三女　え？

弟　米ひとつぶが、おにぎりやめまーす……って、零れ落ちることは、出来ないんだよね。

三女　……誰か通訳して。

次女　そのまんまなんじゃない？

三女　大姉ちゃん。

弟　仕事の時間です。

長女は、トカレフを渡そうか迷っている。

三女　大姉ちゃん！

迷い続けている長女の手から、
弟がそっとトカレフを抜き取る。

弟　いってきます。

弟が食卓から去っていく。

三女　待ちなさい。

三女が食卓から立ち上がり、鞄の中に何かを突っ込んで、

三女　待て！

弟の後を追った。
立ち尽くす長女と、ゆったり座る次女だけが残った。

ｓｐａｃｅ７

トカレフを弟に差し出すことも出来ず、
かといって、引っ込めることも出来ない長女の手が、
どうしようも出来ずに固まっている。
その手の行く末を次女はじっと見ていたが、

次女　大姉ちゃんは、
長女　え。
次女　何がしたいの？
長女　え……
次女　昔さ。

次女　１２時ぴったりに鏡に光を当てたら未来が見えるとか、なんかそんな遊びしたこと思い出して。
長女　……ああ。
次女　あれやろうって言い出したの、大姉ちゃんでしょ。
長女　ちいちゃんじゃなかったかな……
次女　盛りあがったのは私だけど、言いだしっぺは、大姉ちゃんだったと思う。
長女　それが、
次女　でもそのあと憶えてない。
長女　え。
次女　大姉ちゃんの反応、憶えてない。やろうって言い出すわりにはね、いつもそんな感じ。
長女　それが何、
次女　遠慮してるのか、とか、思ったこともあるけど。私らが結構言いたい放題だし、でも、

次女は長女が何か言うだろうと見たけれど。

次女　何をどうしたいとか、ただ単にないんでしょ？　ああ、そう、ああ、そうなの、ああ、そうなんだ……って相槌打ってりゃ時間は過ぎていくしね。大姉ちゃんが何もしないのは納得よ。得るものなければ失わずに済むから。

次女が椅子から立ちあがって眠たそうに部屋を出ようとした時、

長女　決めたの。

長女が答えた。

長女　私、決めたのよ。

次女が振り返る。

長女　あの子が、この仕事始めた時に、もう、決めた。

次女　何を？
長女　何も、してやるものかって、決めた。
次女　え？
長女　だけど、見てやろうって。見続けてやろうって。見えないけれど流れていく空気とか、虚しいけれど流れてくるニュースとか、乱暴に流れていくだけの時間とか、見つめ続けてやろうって。賛成も抵抗も出来ないなら、見るしかないから。おぞましいことも、全部。見てやるの。って、決めたの。
次女　そう。

長女はじっとテーブルに視線を落としたまま。

次女　私はもう何も見てやるものかって、決めてるから。

行進曲が聞こえる。
足並み揃った足音。
無数の。
それがいつのまにか足並みが揃いすぎて、
あんまり揃いすぎて、
やがてひとつの大きな足音になる。
ドシン。
ドシン。
ドシン。
ジダイジダイ透明巨人の足音が、
聞こえてくる。

ｓｐａｃｅ８

いつのまにか。
三女が戻ってきている。
気配を感じて、次女が振り返る。

次女　びっくりした……帰ってきたなら何か言いなさいよ。

三女は突っ立ったまま。

次女　どうしたのよ？

何も答えない。
長女も不思議に思って、

長女　なあに？

三女の顔は強張っている。
長女は立ちあがって三女の傍までやってくる。

長女　何かあったの、そんな怖い顔し……

長女は、何かに気がつく。

長女　どうしてあなたがそれ持ってるの……！

三女の手には、トカレフ。
次女、驚いて三女からトカレフを取り上げる。

次女　あいつは！？

三女は答えない。

次女　ねえ、あいつは？

三女の顔は強張ったまま。

次女　何にも持たないで仕事に行かせたの！？
三女　持たせた。
次女　じゃなんであんたが持ってるのよ。
三女　こっちのほうが、性能、いいんだよって、別のものを、渡した。
次女　別のもの？

三女　上等な、皮袋に、いかにも、大事そうな感じで、渡した。
長女　……何を？

三女は答えない。

次女　あんたがこれより性能いいもの持ってるわけないじゃない。
三女　あの子、バカだから、すぐに信じたけど。
長女　ねぇ。何を渡したの？

長女が三女の体を揺する。

長女　ねぇ。

三女は黙ったまま。

長女　ねぇ！

長女が三女を大きく揺さぶると、
三女が持っていたカバンが落ちてゴロンと人参が数本床に転がった。
次女が一本、取り上げる。
思わず、笑ってしまう次女。
笑えない長女。

三女　お姉ちゃんたちは、あの子が人殺しでも平気？　しょうがないんだって、開き直る神経がもうおかしい。
駄目なんだよ、絶対にそんなことを許しちゃ駄目。こんなものがあるから感覚マヒするんだ。

ぼちゃん。
三女は鍋のスープの海にトカレフを投げ捨てた。
次女は急いで取り出し、

次女　これは自衛になるの！
三女　攻撃とどう違う？
次女　あんたはこっから逃げようとする人の必死さを知らないからそんなヌルいこと言うのよ。
三女　そんな必死の人間を、あの子はぶっ放してるんだ。
次女　これがなかったらどうなると思うの！？

ピィンと、張りつめた空気の音が聞こえるような、沈黙。

長女　……どうなるの？

長女　ねぇ、ちいちゃん……どうなるの？

次女は言いたくない。

三女　それでも。

三女の意志は硬い。

三女　それでも。絶対に殺しちゃいけない。
次女　あの子のほうがが殺されても？
三女　こんな世界がおかしいんだ。
次女　だけど生きていかなきゃいけないのよ。
三女　理想を語り続けなきゃ未来が死ぬ。
次女　あんたの理想があの子を殺すことになっても？
三女　私は間違ってない。
次女　みんなそう言うのよ。
長女　やめなさい！

次女と三女は黙る。
あまりの大声に、長女は自分で驚く。

長女　探しにね、

長女　探しに、行かなきゃね……

長女はウロウロと歩くが、

長女　でも、

長女　守秘義務があるから、

長女　どこに行ってるのか、

長女　知らなくて、

長女　私、

長女　見送ってた、

長女　だけだから。

どこに行けばいいか、分からずウロウロと、ウロウロとするだけ。

次女　大姉ちゃん……

長女はウロウロ。

三女　大姉ちゃん……

長女はウロウロ。
ウロウロと歩き続ける。

長女　探しに行かなきゃ。

心もとない足元。
ウロウロと、
部屋の中を歩くがそれはいつのまにか、
「大姉ちゃん！」
次女の声が後方から聞こえる。
「大姉ちゃん！」
三女の声も後方から聞こえる。
長女はフラフラと歩き続ける。
家の食卓は遙か後ろに流れる。
まるで車のバックミラーに映っては流れて消えていく背景のように。
鍋もスープ皿も流れて消えていく。
「どこ行くのー？」
次女の声がはるか後方から聞こえる。

長女　探しに行くのよ。

「どこ行くのー？」
三女の声がはるか後方から聞こえる。
あるき続ける長女の後ろには、もう何も見えない。
何もない、何もない風景だけが延々と続いている。
どこもかしこも似たような、何もない風景。
延々と、
延々と、
時々流れ星のような光が飛ぶだけ。
延々と、
延々と、
何もない。
何もない、だけがある。
長女の心もとない足音はささやかであるが、
少しずつ、
少しずつ、
その足音は力を増していくようだ。

ド
ド
ド
ドシン

長女　探しに……

ふと、長女は後ろを振り返る。
足音は聞こえなくなる。
長女はちょっとだけ躊躇しながら、
一歩を踏み出す。
と、
ドシン。
響いた。
もう一歩踏み出すとまた、
ドシン。
響いた。

長女は歩きながら耳をそばだてる。
足音を聞いているのではない。
足音の奥のほうに隠れているような
別の音に耳を澄ます。

小さく。
微かに。
聞こえる。

次女　わぁ。大姉ちゃん、指の端っこが赤い。
三女　うん、赤い。
三女　私のは？　私のは？　私のは！？
次女　ナンだ。ふつうー。
三女　どうして赤いの？

長女も小さく、微かに呟いた。

長女　流れてるから。

次女　何が？

長女　だから、ち。

三女　ち？

長女　赤い血。

次女　これ血の色？

長女　懐中電灯の灯りで透けて見えるの。

三女　血の色ってなんで赤いの？

次女　それはあれだよ、あれ。

三女　あれって？

次女　あれはアレ。

三女　ちい姉ちゃん、知ったかしてる。大姉ちゃん、なんで？

長女　なんか……血の中に赤くなる色のモトがあって、

三女　モトって何？

長女　なんだったかな。

三女　なんで？　なんで血って赤いの？　なんで？　なんで？

長女　そう決まってるの。

三女　なんで決まってるの。

長女　昔から決まってるの。

三女　人間の血は赤って？　なんで？

次女　ニンゲンだからに決まってるじゃん。バカ。

ざぁ

ざぁぁ

ざぁぁぁ

どのくらい歩いたのだろうか。

波の音が聞こえる。

長女は振り返る。

ざぁ

ざぁぁ

ざぁぁぁ

波が足元まで打ち寄せる。

ざぁ
ざぁぁ
ざぁぁぁ

長女は海の遠くのほうまで見据える。
太陽がゆっくりと海に沈んでいく。
ギラギラの夕陽。
波に反射して、ギラリ。
鏡のように輝いた。

長女　……ミラー……

ざぁ
海面を見つめていた長女は、
寄せてひいていく波に近づく。
足元の波を見た。

波に乗って、ヘッドフォンが流れてくる。
長女はゆっくりと手を伸ばす。
ヘッドフォンを波間から引きずり出す。
コードがずるずると引っ張られてその先に、
スマートフォンのようなものが姿を現す。
袖で海水を拭う。
防水のケースに入っているのか、
長女は中身を取り出した。
弟のもの。

長女は海の彼方を見る。
地平線に半分、
太陽が隠れている。
濡れたヘッドフォンを耳にあて、
長女は手元で何かを操作した。

ざ
ざざ
ざざざ

機械の不具合のような雑音。
やがて波の音になって、

聞こえてくる。
ギィ
ギィィ
船の音が聞こえる。

長女の耳には、たぶん。
弟の最後の言葉が聞こえている。
後を追うように、
とぎれとぎれ、繰り返す。

長女　見て見て。爪の先にサイレントスターが乗っかってる。

長女　何にも言わないから。

長女　集中しないと聞き逃す。

長女　どうして息を吸って吐いて吸って吐いているのか。

長女　夜眠って朝目が覚めるのか。

長女　耳を、澄ます。おねいちゃん、

長女　目を瞑ると星が見えるでしょう。

長女　毎晩、空を見上げて、星と、宇宙と、空と、

長女　ナンにも繋がらない。当たりまえだ。サイレントスターは、

長女　目の中、砂粒の中、水筒から落ちる水滴の中、吐く息の中、靴の裏底、睫の先、おにぎりの米粒にあった、

長女　僕は、バカじゃない。

長女　けど、透明巨人はバカだ。だからやっぱり僕も、

するりと、ヘッドフォンを外す。
聞こえてくるのは波の他には、
流星群のように流れていく砲弾。
ギラリ。
海面に太陽が反射して、
長女は目を覆った。

長女　……眩しい。

長い間、長女は目を覆った。
カチコチ。
長い長い時間が過ぎて、
太陽はすっかり海に沈む。
どこかで午前０時の時計のベルが鳴っているだろう。

しばらく。
そのまま。
時間が止まったような、沈黙。

カチコチ。
ゆっくりと時間が流れ始める。
覆った手が
静かに、静かに顔から離れて、いく。

ｓｐａｃｅ９

目の前に船。
老婆が２人、すでに乗っている。

老婆２　あとひとり乗れるよ、
長女　……え。
老婆３　ピクニック行き。
老婆２　戦場海上境界ラインのど真ん中でね。
老婆３　ビールとおにぎり。

老婆たちは、妊婦と助産師が年老いたようにも見えるかもしれない。

老婆３　早くしなよ。
老婆２　始まったみたいだからねぇ。
老婆３　海の上でも。
老婆２　地の果てまでもね。
老婆３　見えるかい。どこまでも、戦場境界ラインが続いている。
老婆２　あんた聞いたんだろ？
長女　え。
老婆２　サイレントスターの瞬きと、
老婆３　グレートリバーの流れをさぁ。
老婆２　だからここにやってきたんだろうよ。
老婆３　ピクニック行き。
老婆２　あとひとり乗れるよ。

長女は手の中のヘッドフォンを見る。

波の音が聞こえる。

長女は老婆たちを見る。
首を横に大きく振って、拒否した。

老婆２　それもいい。
老婆３　それもあり。
老婆２　まだ望みはあるほうかい？
老婆３　選べるみたいだからね。
老婆２　生きていきましょうよとは言わないけれどね。

老婆２人は、静かに船を出発させる。

ギィ

ざざぁ
ギィ
ざざざぁ
ギィ
ざざざざぁ

長女は大きく手を広げて、
広がる海を抱きしめた。
腕の中にはヘッドフォン。
まるでお包みに包まれているように見える。
長女は、歩き出す。

これは海を鏡代わりに、太陽を懐中電灯代わりにした未来の世界のひとつなのか。
長女の現在そのものなのか。
どちらでもかまわない。

長女は歩き続ける。

長女　少しだけ肌寒い春の夕暮れ、爪の先みたいな三日月、ポツポツ街灯が点灯しはじめる商店街を歩いて家に帰る。もう夕焼けは過ぎて早く帰らなきゃいけないけれどスカートの裾を握りしめてポテポテ歩くあの子の速さに合せて一歩一歩ゆっくり。電信柱が連なって、空を区切るように電線が向こうの方まで繋がってカラスが止まってた。近道の横道を歩くとお風呂の匂い、ご飯の匂い、お茶碗の音、どこかの家から大きいヴォリュームでテレビの音、いつもの夕方、いつもの帰り道で、あの子、立ち止まった。引っ張っても何しても動かなくて、面倒臭くなって私ひとりで歩きだした。家はすぐそこ、でも１０億光年先にある感じ。水槽の中みたいな空気、知ってるはずなのに、全然知らない惑星で迷子の気分。置き去りにされて聞こえるはずのあの子の泣き声が聞こえなくて、振り返る。爪の先の三日月を見あげて、ちっさいちっさい両手を空に、にぎにぎ、結んで開いている手、私、何かを、思い出しそうな感じがして、でも何か分からなくて、もどかしくて、サイレントスター……

長女　もう、

長女　憶えてない、

長女　けど。

長女　「パパとママに内緒で、サイレントスターのこと、話してくれない？　私はもうね、ほとんど思い出せないから」

長女　私が、

長女　あの子に、生まれたばっかりの弟に、

長女　言ったって、

長女　そのことさえ、もう、憶えてないけど。

長女は手の中のヘッドフォンを、

長女　見てやろうって。

自分の耳に、

長女　見続けてやろうって。

装着して、

長女　見えないけれど流れていく空気とか、虚しいけれど流れてくるニュースとか、乱暴に流れていくだけの時間とか、見つめ続けてやろうって。賛成も抵抗も出来ないなら、見るしかないから。おぞましいことも、全部。ジダイジダイ透明巨人の足跡を、

ヘッドフォンから流れるやけに明るい音楽を最大ボリュームにした。

長女は死ぬまで歩き続ける。

おしまい